

寸評以前の印象記

イワクラ(磐座)学会会長 渡辺豊和

八六年一月発行拙著『縄文夢通信』で北は青森県、南は鹿児島まで一辺ほぼ五〇キロの菱形スーパークラフィックが樹海を伐り開いて刻みつけられていた。菱形の辺が示す方向はその地の夏至と冬至の日の出、日没を正確に示しているとした。その後その交点には巨石が必在することもわかったが著書として発表するに至らなかったが去年二〇〇五年ははからずも栗本慎一郎が『シリウスの都飛鳥』に私からの資料提供を明記した上で公表してくれたのである。いは知っているむきもある。列島を覆う太陽のネットワークと呼んでいるのだが今度の学術大会で冒頭発表となった岩田朱美(以下敬称略)飯の山ネットワーク論では古代からこの列島には精密な測量技術が駆使された形跡が明確な形であり、整然

とした円錐形山の山頂を測量点とした二等辺三角形のネットワークが列島全体に張り巡らされているというまさに驚天動地の発見といえた。しかし論としては極めて精緻、明晰でありまずは非のうちどころがなかった。時間の都合もあって明確な言及はなかったが別の場で彼女から直接聞いたところではこの測量ネットワークは古代から近世に至るまで営々とつくられつづけ西が早く東にいくほど遅いとのことであった。ネットワークは二等辺三角形が大小様々に組み合わせられて成立しているのとこととであったがこれは同時に大小の円形が組合わさり重ね合されていることを意味する。またこの測量は風水師が使用する羅盤によって二等辺間の角度が割り出されていると岩田は言明するのだから測量の基本は円形

の組合せ、重ね合わせであることを示しているのであって彼女の論文にもそのことは如実に示されていた。ともあれ私の太陽のネットワークは近江、大和間の聖山太郎坊山、三上山、三輪山、大和三山の地理的位置関係から割り出したがそれ以外はコンピュータによって机上で計算されたのであってそれを後に交点を求めて実地に調査しそこに巨石が必在することがわかった。これは仮説検証、帰納法であるのに対して飯の山ネットワークは演繹法によって発見されている。帰納法に比べて演繹法が確実性が高く科学的であるのはいうまでもないだろう。このこともさることながら私が注目したのは彼女が今後の研究課題としたこのネットワークをつくった人々の時空認識の解明である。その中でも特に十干十二支は時間と東西南北などの方位即ち空間とは相即相応しているのだから羅盤によって測量された飯の山ネットワークには重大な時空認識が隠されていると岩田はいう。と私は彼女の説明からそう受取ったがまるで理解していないのかもしれない。

現代物理学ではアインシュタインの相対性原理による時空論が有名だが岩田は古代の陰陽五行にすでにアインシュタイン的な時空認識が秘められていたと直観しているのかもしれない。陰陽五行の方位を克明に追跡した大河内俊光の『方位と選地の謎』にみる研究作業の重厚さは圧巻である。ただあまりに膨大な実地調査の資料であるため最終的結論を掴みそこねてしまった。又大部の著書もいまだ読了していないので今現在これ以上の言及ができないのは残念ではある。藤原定明『古代祭祀と大和三山の暗号』。これは鈴木旭に少々粗過ぎはしないかと批判されたがこの論文の提出には私自身が深く関わっているので他人事にはできない。大和三山(畝傍、耳成、香久山)は二等辺三角形であり畝傍からの中線は三輪山山頂南下の張り出し台地を通る冬至線でありこの中線で二等分される直角三角形は三辺の比、五対一二対一三の整数比のピタゴラス三角形である。(5²+12²=13²)従って大和三山

は人工造山、張り出し台地も人工でありこの張り出し台地こそ太陽のネットワークの起点であるというのが『縄文夢通信』の主題の一つだった。藤原によればこの大和三山二等辺三角形の中線を一辺とする菱形の四辺

はそれぞれ冬至線、夏至線でありしかも、桧原神社(A)、若御魂神社(B)、天神山(C)、不詳点(D)でできる菱形は四辺ともに大和三山二等辺三角形の二等辺と同長なのだという。要するに太陽のネットワークの菱形相似形の小型ネットワークが三輪山東に形成されていた。その菱形全体が元三輪山であり三諸山でもあるという。藤原は大和三山二等辺三角形を天球に重ね合わせるとA、B、C点デネボラ、スピカ、アルクトゥールスがほぼ重なることを発見した。またA、B、C、Dの菱形の四辺は二等辺と等長であるから菱形は二等辺三角形が二個抱き合っている形である。更にこの菱形またA、B、C、Dと大和三山二等辺三角形で成立する関係図形をBC一万四五〇年一月二二三

日即ち冬至の真夜中零時の天球に重ねると菱形の中心に木星が来る。ここがダンノダイラでありダンノダイラも含めて大和三山はBC一万四五〇年には完成していた。

更に同じ図形をAD二〇一二年一月二三日真夜中零時の天球に重ね合わせるとA、B、Cはプロキシオン、シリウス、ペテルギウス、菱形の中心はポラリスと重なることを導き出している。ただ畝傍山頂など図形地点を恒星の重なりほどの程度の正確さか記載の図では不明瞭であること。藤原が重視するギザのピラミッドに刻まれたという年BC一万四五〇年とマヤのカレンダーの最終日AD二〇一二年を大和三山とダンノダイラは示しているとする結論には飛躍がありすぎる。ちなみにダンノダイラには小型段上ピラミッド聖壇の痕跡がありここが元三輪山の祭祀所聖所だった可能性はむげに否定できない。ともあれ藤原の提供した問題は極めて刺激的でかつ壮大。そこまではいいのだがやはり鈴木木の指摘するようにならず事実を精細にかつ徹底的につ

きつめ結論を急ぐのはいましめるべきではあろう。とはいえこの研究は面白いしおおいに進めていってほしいとは思うのは私一人だけではない。まい。

谷口実智代は「矢岳高原のイワクラ現状」だけを報告したのではなく全国イワクラの現状には問題が多く開発等によって消えてゆくものが多く日々その姿を変えている実状であってこれに有効な対処が急がれるという問題提供であり傾聴するだけではなく私たち学会としても行動を起すべき時に来ていると痛切に感じた。最後に私自身のささやかな発見一つ。伊勢のイワクラ巡りで最後に訪れたオーム岩が問題なのである。オーム岩から南を望むと連山がみえているが丁度真南(磁北が真北)より西に二〇度傾いている位置にピラミッド山容があり岩田によれば朝熊山近傍のほかにもう一つ伊勢にある飯盛山ではないかとのこと。神社や前方後円墳で入口(古墳では前方)が北で主軸が真北から西に二〇度傾いているものはゾロアスター教の聖方位を示しているのであってはじめの法隆

寺といわれる若草伽藍や斑鳩宮などはこの聖方位を示し聖徳太子がゾロアスター教と深く関わっていたことを暗示している。しかし太子以前に日本では一度この聖方位が崩れ真北から東に二〇度傾いた方向に変えられた時期があり聖徳太子のはじめの宮殿上宮や蘇我氏が建造したと思われるゾロアスター教の拝火聖壇益田磐船などはそうなっている。オーム岩と飯盛山(未詳)との位置関係は聖徳太子や蘇我氏との関連を思わせる。

また伊雑宮と朝熊山神社を結ぶ二点間の線も真北から西に二〇度傾く聖方位を示している。伊勢神宮、朝熊山、伊雑宮、オーム岩など伊勢神宮周辺の神社、聖地、巨石は天皇家の前に蘇我氏が深く関わっていた気配を強く感じた。またオーム岩は鳥のオームではなく神の真理をいうオームであってこのコトバはゾロアスター教とも無縁ではないのではないのか。

了